

走れメロス

映画文学人生論

太宰治 (1909-48)

『走れメロス』(1940) 「新潮」

『ダス・ゲマイネ』(1935) 「文藝春秋」

『駆け込み訴え』(1935) 「中央公論」

『人間失格』(1948) 「筑摩書房」

私は、信頼に報いなければならない。いまはただその一事だ。走れ！、メロス。

『走れメロス』は中学校の教科書で学んだような気がするが、記憶は定かではない。メロスとセリヌンティウスとの美しい友情をテーマにしたもので、破滅型作家太宰治の作品らしくない小説という印象を抱いていた。

ところが、今回あらためて読んでみて、やはり太宰治作だと納得した。特に初期の作品『ダス・ゲマイネ』と晩年の作品『人間失格』に通じるところがある。『走れメロス』がコインの表だとすると、これら二作品は裏だ。

『ダス・ゲマイネ』の書き出しは、「恋をしたのだ」。語り手は佐野次郎と呼ばれる二十五歳の文学青年で、作者の分身かと思っていると、上野公園内の甘酒屋で知り合った馬場という音楽学校八年生のキザな男も作者の分身。さらに、馬場の親戚筋にあたる画家の卵の佐竹六郎も。

そして、佐野次郎と馬場と佐竹六郎が新進作家の太宰治と同人雑誌『海賊』を編集発行することになった。なんのことはない。太宰治の分身三人が太宰治本人と一緒に同人雑誌をつくるという奇妙な展開になる。

彼ら同人たちの間にはメロスとセリヌンティウスとのような友情は成立せず、お互いに足の引っ張り合いをしている。「僕はつまらん奴を仲間にいれたなあ。あいつは、いそぎんちやくだよ」と



走れメロス

——映画文学人生論

馬場は佐竹をけなし、「馬場は全然だめです。音楽を知らない音楽家がいるでしょうか」と佐竹は馬場をけなす。そして、馬場曰く、「君、太宰つてのは、おそろしくいやな奴だぞ」。

四人のうち佐野次郎だけは純真で、「僕は馬場さんを信じています」という。まるで、メロスが約束を守って帰ってくるのを信じるセリヌンティウスのようなのだ。

彼は走った。走れ、電車。走れ、佐野次郎。走れ、電車。走れ、佐野次郎。——そして、佐野次郎は電車にはね飛ばされて死んでしまった。

『人間失格』は、恥の多い生涯を送って来ましたという大庭葉蔵の手記の形式をとっている。葉蔵は最後は脳病院に入院させられて、狂人としてのレッテルを貼られたことを自覚し、「自分」はもはや人間を失格したのだ、と確信する。

そこに至るまでの過程で、愛や友情への信頼を失い、「神に問う。信頼は罪なりや。果たして、無垢の信頼心は、罪の源泉なりや」という切実な問いかけをしている。

メロスの場合は、友情のハッピーエンドになっているが、佐野次郎と大庭葉蔵の場合、そうなっていない。文学としてどちらの終わり方がすぐれているかはさておき、教科書の教材としては『走れメロス』がとりあえず無難ということか。

ここを過ぎて、一つ二銭の栄螺かな

太宰治